

用語解説

あ

秋まき栽培

秋に種をまき、冬から春にかけて収穫する栽培。

い

移植

成した苗を苗床や本圃に植えること。通常は播種床→苗床を仮植または移植、苗床→本圃は定植(ていしょく)という。

一番花

株の中でいちばん最初に咲く花。

いやち現象

同じ場所で同じ種類をつづけて栽培すると成績がおちる。この現象を忌地(いやち)、または連作障害(れんさくしょうがい)という。土中の肥料など各種の栄養分のバランスが崩れたり、その一部がひどく少なくなったり、栽培した作物の根から分泌した特殊な有害成分なり、あるいは土中の微生物の具合いや、土の性質の変化など、忌地の原因はさまざまである。

う

ウイルスフリー

株分けや挿し木、接ぎ木、球根等で増やす植物はウイルス病に一度侵されると病気を取り除けない。ところが生長点を培養するとウイルスに侵されていないウイルスフリー株が得られるため、これを増殖し無病苗として生産販売している。

畝立て・畝幅(うねたて・うねはば)

畝立ては畑に作物を植えつけるため、間隔をおいて土を高く盛り上げる作業で、その間隔を畝幅といい作物によって異なる。

え

栄養生長

花や子房などの生殖器官に対し、葉や茎のことを栄養器官という。栄養器官のみを茂らせる生育のことを栄養生長という。

栄養繁殖

タネでの繁殖に対して、挿し木、接ぎ木、取り木、株分け、組織培養などで繁殖する方法をいう。

液肥

普通の肥料は粉状または粒状であるが、液状の肥料を液肥あるいは液体肥料という。

か

塊茎(かいけい)

地下茎の一種地中の茎の先がでんぷんなどの養分をたくわえて、塊状に肥大したもの。ジャガイモ、キクイモなど。

化成肥料

チッソ、リン酸、カリを化学的に合成して2種類以上配合した肥料。速効性、緩効性の両方がある。

活着

移植や挿し木をした植物が十分に根づいて生育すること。

株間

作物の株と株とのあいだ。作物によって適正な間隔があり、播種・間引きなどで、等間隔に取ることがより揃いをよくする。

株分け

根株を分割して繁殖する栄養繁殖の一つ。

仮植え

苗木などの移植で、本植えの前に一時的に植えておくこと。

カリウム

肥料の三要素のひとつ。根の発育を促進し、根肥ともいわれる。

緩効性肥料(かんこうせいひりょう)

肥料の有効成分が少しずつ土壌中にとけ出して、有機質肥料に似た効き方をする化成肥料で、肥効が長時間続く。1回の施肥量を多くしても濃度障害が出にくく、一般には元肥主体栽培に使われる。

かん水

水を与えること。

寒冷紗

綿やビニロンなどの化学繊維で網目模様に編んだ布状の被覆資材の一種。目の粗さや色の違いで遮光率が異なるので、一般に遮光用に使うが、防寒や防風、水分の蒸散防止などの目的でも利用される。

き

休眠

植物は開花・結実、球根形成などが終わると生育活動が停止するか、停止に近いほどに弱まり、あと時期がくると再び活動を始めるものがある。このような活動の一時的な休止を休眠という。



苦土石灰

苦土(マグネシウム)と石灰(カルシウム)の両方を含む肥料だが、それが酸度の調整に役立つことから、肥料としてよりも酸度調整剤として使われることのほうが多くなっている。また、マグネシウム、カルシウムともに肥料の五要素に含まれているので、肥料としても十分役立つ。

クラウン

一般的には根と茎の境界部のことであり、茎の基部とそこから発生している多数の根の基部(茎に近い部分)をひとまとめにしてクラウンというが、いちごなどでは特に発根した新株全体あるいはその株元の部分を指している。



莖葉(けいよう)

地上茎につく葉のこと。



光合成

光合成は、炭素同化作用、炭酸同化作用あるいは簡単に同化作用とも呼ばれ、緑色植物が光のエネルギーを利用して、炭酸ガスと水から糖やデンプンなどのような炭水化物を合成する働きをいう。

耕種的予防法(こうしゅてきよぼうほう)

栽培環境や栽培方法を工夫して病害虫の発生を予防する方法のこと。詳しくはP128の参考資料②を参照。



催芽(さいが)

種をまく前に、発芽を始める状態にすることを催芽という。発芽を早めたり、発芽の不揃いをさける効果があり、方法としては、十分吸水させた種を、その種の発芽適温よりいくらか高い温度に保って発芽状態にする。

作型

作物はつくる時期やつくり方によって、いろいろの場合があるが、それらを作型という。たとえば促成・抑制裁培、夏秋穫り、冬穫りなどいずれも作型である。

挿し木

切り取った枝や茎、根などを挿し床に挿し、新しく根や芽を出させる繁殖方法のひとつで、家庭園芸で広く行われている。

し

子房

めしべの一部で受精すると中に種子を作り果実になるところ。

種子繁殖

野菜や草花の多くは、種子によってふやす。このように種子によってふやすことを種子繁殖という。樹木や花木は普通、接ぎ木や挿し木によってふやすが、これを栄養繁殖という。

条間

種のまき条とまき条、または苗の植え条と植え条の間の間隔。狭すぎると軟弱徒長しやすく、広すぎると本数がいらず収量が上がらない。

条まき

地面にすじをつけてその上に種をまくこと。すじまきともいう。

人工授粉

人の手を介して行われる受粉(花粉が雌しべの先端に付着すること)。自然状態では受粉しにくい場合や、育種を目的とする場合などで行われる。

せ

整枝

枝や蔓の数を適当に制限したり、またその配置を図って作柄をよくすることを整枝という。

セル成型苗

根茎が数センチ以内の成型された容器にセル専用培土を使用して育苗する方法。プラグ苗と呼ばれることが多い。規格された苗の大量一括生産に適している。移植・定植時の取扱が容易であり、輸送性がある。また省力・機械化が図りやすい。根巻を生じやすいため、適期の移植等が大切。

そ

促成栽培

収穫の前進をねらって、育苗から収穫の終わるまで、ハウスあるいは温室で栽培する方法をいい、特別な温暖地は加温しないがほかは加温する。

速効性肥料

効き方の早い肥料を速効性肥料という。たとえば硫酸や尿素などがある。

た

耐寒性

低い気温に耐えて生育する性質を耐寒性という。

台木

植物を接ぎ木する場合、根部に当たるものを台木という。たとえば、スイカの双葉苗をユウガオの双葉苗に挿し込んで接ぎ木すると、根はつる割病(つるわれびょう)に侵されないうし、地上の蔓には目的のスイカが実る。この場合のユウガオを台木といい、スイカを接ぎ穂(つぎほ)という。なお、果樹等は病害防止の目的ではなく、品種の形質を正しく保持する苗木をつくる目的で、それぞれ必要な台木に接ぎ木する。

耐暑性

高温によく耐える性質。

耐病性

病気にかかりにくい性質。

単為結果(たんいけっか)

受精しなくても果実ができることをいう。普通は種なしとなる。花粉やそれにかわる物質の刺激によって、受精せずに結果するものを他動的単為結果といい、受粉やその他の刺激なしに結果する自動的単為結果(キュウリ、いちじく、ぶどう)と区別する。

単粒構造(たんりゅうこうぞう)

土が単一の粒子でできている場合、この状態を単粒構造という。

団粒構造(だんりゅうこうぞう)

土の粒子が集合したものを団粒(だんりゅう)といい、団粒でできている土の状態を団粒構造という。植物栽培上、好ましい土壌状態である。

ち

チッソ

植物の肥料成分として、最も重要なものの一つである。窒素が不足すると作物は小型となり、葉は黄色を帯びて子実の収量も低下する。一方、過多の場合は、葉は濃緑となり軟弱徒長し病虫害を受けやすく成熟も遅れる。

中耕(ちゅうこう)

栽培中、畝の表層が硬くなるため、通気性を良くする目的で浅く耕す作業を中耕という。除草と同時に行うことが多く、この場合中耕除草という。

つ

追肥

作物の生育期間中に施す肥料。肥料の種類や量、施肥の回数や時期は作物の種類、気候、土壌、生育状況により異なるが一般には速効性肥料を用いる。

接ぎ木苗

寒さや病気に強くするためあるいは生育を強くして収量を増すなどのために、病気に強く生育旺盛な台木を利用して接ぎ木した苗。

土寄せ

作物の株元に土を寄せる作業をいう。一般には株もとを保護するために軽い程度に行うが、根深ネギの長い白根は、特に深い土寄せでつくられる。

つるぼけ

すいか・メロン・かぼちゃなど、蔓もの野菜の場合、蔓や葉が茂りすぎて開花や着果が妨げられる状態を、蔓ぼけ現象という。

て

定植

苗床などで育苗した苗を最終的に畑に植える作業を定植という。

摘芯(てきしん)

枝や蔓の先端を芯(しん)といい、これを摘み取ることを摘芯という。夏栽培に用いるきゅうりの品種には、蔓に着生する花の数が少ないので、最初に伸び出す蔓(これを親蔓という)の芯を早めに摘み取って、わき芽の伸びとその数の増加を図るなど、摘芯の一例である。

と

とう立ち

花を着生する茎が伸び出すことがとうだち(苔立ち)で、これを抽苔(ちゅうだい)ともいう。温度や日長がその大きい要因になっている。

徒長(とちょう)

チッ素や水分過多、日照不足などで、植物の茎や枝が通常以上にやわらかく長く伸びること。

ね

根鉢

鉢の中などで植物の根と根についた土壌の集まりのことをいう。

は

播種

種まきのこと。

鉢上げ

苗床から鉢に移植すること。庭植えの木や草を鉢に移植する場合にも使われる言葉。

春まき栽培

春に種をまいて夏の前に収穫する栽培。

ふ

覆土

種子をまいた上にかぶせる土を覆土という。

分けつ

分けつともいう。イネ科植物の、根に近い茎の節から枝分かれすること。

ひ

pH値

pH(ピーエッチ)は溶液の酸性やアルカリ性の度合いを示す単位で、土壌溶液のpHは植物の生育に大きなかわりを持つ。0～14の段階であらわし、中性はpH7、酸性度が強まるにしたがって順次にpH6、pH5、pH4……、またアルカリ度が強まるにしたがって順次にpH8、pH9、pH10……のようにあらわす。主な作物・野菜が好む土壌pHはP131の参考資料⑤を参照。



べたがけ栽培

春まきニンジン、秋冬・春まきダイコン、春植えレタスなどに保温、防霜、防風、防虫のためにベタ掛けをする資材用いて栽培する方法。軽くて通気性もよく、取扱の容易なもので、寒冷紗等が使われる。



穂木

接ぎ木で増やすために、台木に接がれる部分。増やしたい植物の枝で、接ぎ木用に調製したもの。接ぎ木の場合も穂木という言葉を使うが、区別するために「接ぎ穂」といわれることもある。

本圃

苗床などのように、栽培のある期間だけでなく、その栽培を完了するまで引き続き使用する圃地を本圃といい、苗床から別の苗床に植え替えることを移植、苗床から本圃へ植え付けることを定植という。



間引き

苗床や直まきの畑で、密生している部分の苗を適当に取り去り、また、奇形や徒長したもの、育ち遅れたものを取り除く作業をいう。なお、以上の場合に限らないで花や果実、枝であっても、その一部を取り除くことを一般に間引くという。

マルチ栽培

ワラやモミガラ、またはポリエチレンフィルム等を使って、株の周囲や畝の上を覆うことをいう。マルチ効果としては、地温調節、水分保持、雑草防止、土の膨軟保持、病害防除等がある。詳しくはP130の参考資料④マルチの種類と効果を参照。



芽かき

余分に出た芽を若いうちに摘み取って、樹形を整えたり、果実・花の生育を調節すること。



元肥

作物を栽培する前にあらかじめ田畑に施しておく肥料。種類・施用量は、作物や栽培型により異なる。



誘引

きゅうり・かぼちゃなど蔓性の野菜はもちろん、倒伏懸念のある作物は支柱を立ててひもなどでくくる。この作業を誘引という。

有機質肥料

油粕、魚肥などのように有機質を含んでいる肥料をいう。これに対して化学肥料を無機質肥料という。

よ

葉身(ようしん)

葉の広がった部分。

葉柄(ようへい)

葉身(葉の主要部分)を支えて茎に付着する柄のように細くなった部分。

ら

ランナー

いちごやオリヅルランは、親株からツルを横に伸ばして子株をつくる。その際のツルをランナーという。

り

鱗茎(りんけい)

地下茎の一種。葉が養分をたくわえて多肉となって重なり、球形や卵形になったもの。タマネギ、ネギなど。

輪作(りんさく)

いくつかの作物を一定の順序で繰り返し栽培することを輪作という。これは圃地の生産力保持と営農成果向上が狙いであり、種類の選択、組合せ、作付順のほかに圃地の使用順序をも合理的に計画しなければならない。

リン酸

肥料の三要素の一つ。開花、結実を促進する。実肥ともいう。

れ

連作障害

連作によって起こる作柄の不良を連作障害または忌地(いやち)現象という。原因は、特定の病害が甚だしくなる、特定の土中養分の欠乏、塩積(えんせき)、根が分泌した有害成分のためなど場合によって様々である。

わ

わき芽

葉のつけ根にできる芽。普通、葉の基部の上側にできるが、葉柄の内側に生ずるものも多い。腋芽。